

---

# 遊戯王デュエルモンスターズ 真十二皇将

アーカナイト・マジシャン / バスターを使うC O 2

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王デュエルモンスターズ 真十二皇将

### 【Nコード】

N4199Y

### 【作者名】

アーカナイト・マジシャンノバスターを使うCO2

### 【あらすじ】

僕の名前は真田遊香。こんな名前だけど男だ。

GXの世界に転生したんだけど僕の歳は十代達より3個下！？

せっかくデュエルアカデミアに入学したのにー！！

とりあえずアカデミアで出会ったベルクと共に頑張っていこう！

ん？何を？っていうかこれ前にも言った事あるような……

これは『遊戯王デュエルモンスターズ The ?? Emperor  
or』の再編小説です。

## P r o l o g   G o   t o   t h e   r o a d   t o   h o m e (前書き)

あらずじにも書いてある通りこの小説は『遊戯王デュエルモンスターズ The ?? Emperor』の再編小説です。

内容が変わってもストーリーはあまり変わらないです。

## P r o l o g   G o   t o   t h e   r o a d   t o   h o m e

視点：？

「卒業しちゃったな〜…」

僕は今、船のデッキにいる、大きい船だ。

聞いたところによると、ざっと500人くらい乗れる設計らしい。

僕の名は真田<sup>さなだ</sup> 遊香<sup>ゆうか</sup>。

僕は今、孤島に建てられた寄宿制養成学校を卒業して本土行きの船に乗っている。

女みたいな名前だけど僕はれっきとした男だ。

僕の両親は女の子が生まれてくると思って女の子の名前しか考えてなかったらしい。

病院なんかで名前呼ばれたときなんかは「ほんとにあなたが真田遊香さんですか？」なんて目で見られてしまう。カルテには男と書いてあるだろうに。

ちなみに僕には前世の記憶がある。

それもフラッシュバックするなんて曖昧なものじゃなく、鮮明な記憶だ。

僕のその時の名前は何だったか、どんな性格だったか、何歳で死んだのか、なぜ死んだのか、友達は何人いたか、恋人はいたのか、どんな人生だったか……そんなことを事細かにきっちり覚えている。

ちなみに言うと僕が死んだのは高校生の時、入学したてだったかな。

友達は結構いた。

当時は少しオドオドした性格で、友人の話によると容姿も相俟つかそんな性格にも関わらず僕はなかなかモテたらしい。だけど女の子が苦手だった僕は当然、彼女いない暦〃年齢だった。

高校の入学式の翌日、高校への通学路でどこかの幼稚園の通学バスが目の前に現れた映像を最後に前世の記憶は途切れている。多分、その時に僕は死んだんだろう。

そして僕は今19歳。さつきも言った通り寄宿制デュエリスト養成学校。通称、デュエルアカデミアの卒業生だ。

そう、僕は俗に言う異世界への転生者なのだ。そしてここは“遊戯王デュエルモンスターズGX”の世界だ。気が付いたら赤ん坊となつてこの世界へ来ていた。

まあ、それは良いとしよう、せつかくGXの世界へ来たんだ、存分に原作介入しよう！なんて思っていたんだけど……僕の歳が十代達の年齢から3つ下……つまりは後輩ということが判明したんだ。

十代達に会えなかった……。せつかくデュエルアカデミアに入学してきたと思つたのに……つてな感じで現在落ち込み中。

つていうかいったい僕は誰と話してるんだ？

『遊香、あなたいったい誰と話しているの？』

「え、あ、いや、なんでもないよ。うん」

『ふうん……』

でも入学して収穫が無かった訳じゃないんだ。

僕はデュエルアカデミアで、あるモンスターと出会った。

名前はベルク。なんとベルクは十代のパートナー、ユベルの妹だというのだ。

十代達が精霊世界から帰ってくる拍子にユベルに着いて来たが置いて行かれたらしい。

アニメではそんな描写は無かったけど……、もしかしてよく聞く様

なイレギュラーである僕の存在の影響なんだろうか？

ユベルは見た目どおり中性だが、ベルクは完全な女。

精神年齢は16歳くらいかな、確実に僕よりも下だと断言できるね。容姿はユベルの右半分が女で左半分が男なのに対し、ベルクはユベルの完全女性版って感じ。

肌の色は人間の様な肌色でユベルと同じような黒い衣服「？」を着ている。露出度が高いです／＼／＼／＼／

髪はユベルと違い黒髪のストレートヘア。見事に僕好みである。

『あと何時間で遊香の家なのかしら。楽しみね（ - - ）』

なんか記号で表せそうな表情をしているベルクさん。

別に可愛いなんて思っていないからね？うん。大丈夫大丈夫、煩惱退散煩惱退散。

あと、アカデミアでは友達もできたね。でも上級生が多かったかも。何よりメインキャラである早乙女レイやティラノ剣山等とも親交を深められた。僕から声を掛けたんだけど、前世だと女の子に声を掛けるなんて想像もできない。

特に早乙女レイとは年齢が大して変わり無いこともあり、意気投合できた。

まあ殆どがデュエルや十代や十代とか、十代だったり十代等についての話ばかりだったけどね。

『遊香、着いたみたいよ。』

「ん、港に着いたの？ふあああゝ」

『おはよう遊香。』

「デッキで眠ってしまったのか…暖かいからなあ…。ともかく港に降りよう。」

『ええ』

## Episode? two types light shine (前書き)

「The ?? Emperor」よりもだいぶオリカが少なくなりました。

これは喜ばしい事かもしれませんが。今のところモンスター2体ですよ！

いや、まあホントは一枚も無い方が良いでしょうけど……

ともかく久々に投稿できました！

今回は挿絵も2枚あります！

あ、でも1枚目はイラストじゃありませんので悪しからずお願いします。



## Episode? two types light shine

視点：遊香

「見つけたぞすあなあああああああ！！！！！！！！！！」

「ん？」

『遊香、あなたを呼んでいるみたいよ。』

「うわ…あいつ…」

「ふん、やっと追いついたぞスアナダ。」

「僕はスアナダじゃない、真田だ。」

「うつせえよ黙れ。成り上がり如きがエリートの俺様に口答えしてんじゃねえ。」

「実力を付けてレッドやイエローから昇進するってシステムの学校だったはずだけど？」

「てんめえ…！調子に乗りやがってえ！」

「……………はああ…。」

彼の名は井島正<sup>いしましやういち</sup>。

僕の在校中、何かに付けては僕に突っかかって来た自称エリートである。

僕は高等部からの入学だが彼は中等部からの入学で、僕がアカデミアに入学した時、彼はオベリスク・ブルーだった。ちなみに僕は入学時、イエローだったよ。

まあ、原作で言えば彼は初期の万丈目みたいなものである。

「聞いてんのかスアナダ！てめえ、俺様を無視するとはいい度胸だなあ！ええ！？」

もしかしたら万丈目より酷いか？ブルーを名乗ってる割には頭悪いし。

万丈目だって初期の頃でも決闘のルールは分かってたし。

まあ、彼もカード捨てたりはしてたけど。

「チツ…何処までも俺をコケにしゃがって…ハン！ちょうどいい！今日こそはてめえと決着を付けてやる！」

「はあ…」

仕方ない、引き受けよう。

こうなったら彼は誰の話も聞かず、何処までも付いて来て一方的に喋りっ放し。

端的に言うとウザいのである。

「デュエルウ！」「デュエル…」

「先行は頂きだア！俺のターン、ドロォオ！

俺はマンジュゴッドを召喚するぜエ！

そしてこいつが召喚か反転召喚した時、儀式モンスターが儀式魔法を手札に加えるぜエ！」

『マンジュ・ゴッド』

星4 / 光属性 / 天使族 / 攻1400 / 守1000

効果

このカードが召喚・反転召喚に成功した時、自分のデッキから儀式モンスターまたは儀式魔法カード1枚を手札に加える事ができる。

「……………」

「俺はジャベリンビートルの契約を手札に加えるぜエ！そしてその

「ままはつどお！」

『ジャベリンビートルの契約<sup>けいやく</sup>』  
儀式魔法

「ジャベリンビートル」の降臨に必要。

場か手札から、星の数が合計8個以上になるようカードを生け贄に捧げなければならない。

「……………」

「ふはははははー！驚きで声も出ねえようだなア！」

どうしよう、帰りたい。

このデュエル楽しくないよ、こいつすげえ弱い。何も進歩してねえよ、流石の自称エリートだわ。

ねえ、帰って良いよね？サレンダーしちゃおっかな…、もうやだ…。

「いくぜえ！」

手札のフェンリルとプチモス2体とはにわを生け贄にジャベリンビートルを召喚だぜエ！」

ププツwwwプチモスwww

何でフェンリル？wwwい、いったいどんなシナジーが！？www

「おいてめえスアナダ！何笑ってやがるウー！」

「あ、え？ああ、あはは、何でもないよ」

「もう許さねえ！バトルだ！ジャベリンビートルでダイレクトアタックウー！」

「……………はha？」

え、な、何言ってるの？ダイレクトアタック??

「あ、あれ、何だ、反応しねエ！こんな時に調整ミスかよー！」

「……い、いや、先行ターンはバトルフェイズ無理だから。」

「ま、マジかよー！」

「いや、デュエリストにとっては当然の知識だから。」

「……………た…ターンエンドだ…」

井島LP4000

モンスター：マンジュ・ゴッド/攻1400

ジャベリンビートル/攻2450

魔法・罠：無し

手札：1枚

「えっと……僕のターン、ドロー。」

ら、ライトニング・ボルトックスを発動、相手フィールド上の表側表示モンスターを全て破壊する。」

「お、俺のジャベリンビートルが……」

う、うわ、何か申し訳なくなってくる…。

で、でも一応これは決闘<sup>デュエル</sup>、勝負事だ。ひ、非情にならなきゃ。

「えっと、て、手札抹殺を発動、お互いに手札を捨てて、捨てた枚数ドロー。」

そして光の援軍を発動、デッキの上からカードを3枚墓地に送ってライトロードと名のついたモンスター1体を手札に加える。」

「俺のジャベリンビートルが俺のジャベリンビートルが俺のジャベリンビートルが俺のジャベリンビートルが俺のジャベリンビートルが俺のジャベリンビートルが……」

僕にどうしろってんだよ……。

「…………ソーラー・エクステンジを発動。

手札からライトロードと名のついたモンスター1枚を捨てて、デッキから2枚カードをドロー、その後デッキの一番上からカードを2枚墓地へ送る……。

……墓地にはライトロードと名のついたモンスターが4種類以上存在するので手札から裁きの龍を特殊召喚。ジャッジメント・ドラグーンライトロード・ウォリアーガロスを召喚。」

『ソーラー・エクステンジ』

通常魔法

手札から「ライトロード」と名のついたモンスターカード1枚を捨てて発動する。

自分のデッキからカードを2枚ドローし、その後デッキの上からカードを2枚墓地に送る。

ジャッジメント・ドラグーン  
『裁きの龍』

星8 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻3000 / 守2600

効果

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地に「ライトロード」と名のついたモンスターが4種類以上存在する場合のみ特殊召喚する事ができる。

1000ライフポイントを払う事で、このカード以外のフィールド上に存在するカードを全て破壊する。

このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分のエンドフェイズ毎に、自分のデッキの上からカードを4枚墓地へ送る。

『ライトロード・ウォリアーガロス』

星4 / 光属性 / 戦士族 / 攻1850 / 守1300

効果

自分フィールド上に表側表示で存在する「ライトロード・ウォリアー ガロス」以外の

「ライトロード」と名のついたモンスターの効果によって

自分のデッキからカードが墓地に送られる度に、

自分のデッキの上からカードを2枚墓地に送る。

このカードの効果で墓地に送られた「ライトロード」と名のついたモンスター1体につき、

自分のデッキからカードを1枚ドロウする。

「ジャベリンビートルジャベリンビートルジャベリンビートル…」

もつづるさいよ！何なんだよチクショウ！

「ああもう、バトルフェイズッ！

ジャッシュメント・ドラグーン  
裁きの龍とライトロード・ウォリアー ガロスでダイレクトアタックッー！！」

「ジャベリンビートルジャベリンビートルジャベリンビートル…」

井島LP4000 1000 - 850

「……………」

「あ、あの、井島君？」

「……………んだよ…」

「そろそろ学園に戻ったほうが良いんじゃないかな？」

実を言うと井島はアカデミアを卒業できていない。

さっきの決闘<sup>デュエル</sup>を見れば分かるが、彼はあまりにも成績が悪く、理解力に乏しい。

それで1年ほど留年しているのである。

何せ、先行1ターン目にバトルフェイズが行えないという事さえ知らない…いや、覚えられていないのだから。

まあ、卒業に必要な単位が少し足りないだけなので、数ヶ月で卒業は出来るのだと思うのだが。

っていうか受験どうやって受かったんだ彼は…

「そうだな…、次の船で島に戻るとするか……………」

うわ、相当落ち込んでるよ…。少しやりすぎただろうか…。いや、そんな事は無いはず。

でも前に僕が彼に勝った後、彼の寮室のルームメイトに聞いたところ、二週間ほど落ち込みっぱなしだったと聞いたし…。

まあともかく帰るとしよう。

井島と別れ僕は港を出る。ここから駅まで徒歩、電車に乗って家まで向かう。

僕の家は十階建てのマンションだ。

家は母子家庭。父は僕が幼い頃（多分、幼稚園児くらいじゃないかな）に死んでしまった。

父のことは詳しく覚えていない。前世のことは覚えてるのはよく分からないものだ。

「ねえ、君」

「はい？」

駅までの道のりを辿っていると突然、少女から声を掛けられた。彼女はフードをかぶっており、素顔は分からない。

「君は、デュエルアカデミアの卒業生だね？」

「え…そ、そうですか…」

何でそんなことが分かったんだろう？

僕は今、私服を着ている。アカデミアの制服ではない。船で見かけたとか…？井島に聞いたわけ無いしね……。彼女はフードを下ろし僕に近づく。

「なら、僕と決闘<sup>デュエル</sup>してよ」

「あ…でも…。僕、友達と待ち合わせしていて…」

「もう…少しくらい良いじゃない、デュエルしてよ」

うう…僕は押されると弱い…。

それに男としては女の子にお願いされては受けないわけにはいいかな

いし。  
はああ。へたれだなあ、僕。

「……………そうですね、分かりました……………受けます」

視点：ベルク

「「デュエル！」」

こんにちわ、初めまして（？）。ベルクよ。

遊香が女の子の勢いに押されて決闘<sup>デュエル</sup>を受けてしまったわ。

まあ、遊香は頼まれると弱いし、女の子からの頼みだとすると余計にね。



それはともかく…相手の女の子がさつき、こつちを見ていたような……

「じゃあ、僕からの先行です。ドロー！  
……モンスターをセット、カードを2枚セットしてターンエンドです。」

遊香LP4000

モンスター：セットモンスター1体

魔法・罫：伏せ2枚

手札：3枚

遊香にとって定石な戦術。

まずはロックカードを伏せたり、カウンター罫<sup>トラップ</sup>を伏せたりして相手の様子を伺う…。

ただ、遊香の癖で、どうしてもカードをバランスよく配置しようとしてしまう。

それはデッキ構築に関しても同じ。

だから相手のカードが自分の手数を超えてしまうと途端に調子を崩してしまうのよね。

それでもデッキのバランスは良いわけだからそれで何とか保ってるって感じ。

「僕のターンだよ、ドロー。」

僕は、暗黒界の狂王 ブロンを攻撃表示で召喚してバトルフェイズに移行するよ。

ブロンでセットモンスターに攻撃ッ」

『暗黒界の狂王 ブロン』

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1800 / 守400

効果

このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、自分の手札を1枚選択して捨てる事ができる。

「破壊されたRAI-MEIの効果発動です。

このモンスターが戦闘によって破壊された時、デッキからレベル2以下の光属性モンスターを手札に加える事ができます。僕はデッキからシキクリボーを手札に加えます。」

『<sup>ライ</sup>RAI-<sup>メイ</sup>MEI』

星3 / 光属性 / 雷族 / 攻1400 / 守1200

効果

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからレベル2以下の光属性モンスター1体を手札に加える事ができる。

「……僕はカードを2枚セットしてターンエンドだよ。」

少女LP4000

モンスター：暗黒界の狂王 ブロン / 攻1800

魔法・罫：伏せ2枚

手札：3枚

あの女の子は【暗黒界】かしら。

暗黒界と言えば悪魔族シリーズの筆頭として有名よね。

遊香の転生前の話を聞けば、遊香が死んでしまった数週間後に新しい暗黒界のカードを収録したデッキが発売予定だったらしいわ。

それにしても遊香の世界ではデッキなんて売ってるのね。

私たち精霊がカードを手に入れようとする場合、自分自身の精霊としての能力を用いてカードを生成する。

だから私たち精霊は皆、自分と同属性、同種族、もしくは同系統のカードばかりを使う事になる。

…少し考え込んでしまったわね。

遊香「ライトニング・ハーモナイザーを召喚します。そしてこのカードが召喚に成功した場合、

このターン1度だけ手札から光属性チューナーを通常召喚する事ができます。

この効果を使用した場合、ライトニング・ハーモナイザーはこのターンにはシンクロ素材にする事ができません。

僕は効果を使用し、手札から ヴァイロン・テトラを特殊召喚します。」

『ライトニング・ハーモナイザー』

星4 / 光属性 / 雷族 / 攻1300 / 守850

チューナー

このカードが召喚に成功した場合、手札から光属性のチューナー1体を特殊召喚する事ができる。

この効果を使用した場合、次の自分ターンまで、自分はシンクロ召喚をする事ができない。

『ヴァイロン・ステラ』

星3 / 光属性 / 天使族 / 攻1400 / 守200

チューナー

このカードがモンスターカードゾーン上から墓地へ送られた場合、500ライフポイントを払う事で、このカードを装備カード扱いとして自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体に装備する。

このカードの装備モンスターと戦闘を行った相手モンスターを、そのダメージステップ終了時に破壊する。

「更にシキクリボーを特殊召喚します。このカードは自分フィールド上にチューナーのみが存在する場合に特殊召喚できます。」

『シキクリボー』

星1 / 光属性 / 天使族 / 攻300 / 守200

チューナー

このターン中に通常召喚を行っており、自分フィールド上のモンスターがチューナーのみの場合、このカードを手札から特殊召喚することができる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカード以外のモンスターを攻撃対象に選択する事はできない。

「フフ、チューナーモンスターか……」

「ふう……カードを1枚セットしてターンエンドです。」

遊香LP4000

モンスター：ライトニング・ハーモナイザー / 攻1300

ヴァイロン・ステラ / 守200

シキクリボー / 守200

魔法・罠：伏せ3枚

手札：1枚

チューナーモンスター。

遊香のフィールドには3体のチューナーが並んでいるわね。

シンクロ召喚と呼ばれる新しい召喚方法に必要なカードたち。

遊香の話だとこの世界の未来のカードシリーズだそうね。

シンクロ召喚とはチューナーモンスターとそうじゃないモンスターを1体以上が複数以上、同時に墓地に送ることで融合デッキ

遊香の世界ではエクストラデッキと呼ばれているらしい から

特殊召喚する…というもの。

遊香の相手の女の子の様子からして、あの女の子はチューナーやシンクロモンスターの事を知っているのかしら？

「僕のターン、ドロー」

伏せカードの暗黒界の謀略を発動だよ。お互いに手札を2枚選んで捨てて、カードを2枚ドローするよ。

君は手札を1枚捨ててこのカードの効果が無効にできるけどどうする？」

「無効にはしません。」

「じゃあ手札を2枚捨てて、2枚ドローして。」

『暗黒の謀略』

通常罠

お互いのプレイヤーは手札を2枚選択して捨て、デッキからカードを2枚ドローする。

相手は手札を1枚捨ててこのカードの効果が無効にする事ができる。

女の子の指示を受けてデッキと手札のカードを交換する遊香。

暗黒界の特徴は効果によって捨てられる事で特殊召喚されたり、ドロー、相手フィールドの破壊など、手札破壊に強かったり逆に手札破壊と組み合わせやすかったり、墓地にカードが溜まりやすいシリズね。

姉兄ちゃんあにえい（ユベルの事）の事もあって、私は精霊世界でも悪魔族たちと何度か交流がある。

私も本質的には淫魔見たいなものだしね。

「手札から捨てられた事で暗黒界の軍神 シルバの効果を発動するよ。」

カードの効果によって手札から捨てられた時、このカードを特殊召

喚するよ。」

『暗黒界の軍神 シルバ』

星5 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻2300 / 守1400

効果

このカードがカードの効果によって手札から墓地へ捨てられた場合、このカードを墓地から特殊召喚する。

相手のカードの効果によって捨てられた場合、さらに相手は手札を2枚選択して好きな順番でデッキの下に戻す。

「暗黒界の術師 スノウを召喚して、バトルフェイズに移行するよ。」

「それなら立ちは大敵を起動します。」

ヴァイロン・ステラを選択、相手は選択したモンスターしか攻撃できず、全てのモンスターで攻撃しなければなりません。」

「ん、ならブロンでヴァイロン・ステラを攻撃するよ。」

遊香はヴァイロン・ステラを狙わせているみたい。

けどやっぱり遊香の悪い癖パート2が発生してるわね、目的を達成するためにカードを使い過ぎる。

この勝負は危ないかもしれない。

「この戦闘によりヴァイロン・ステラは破壊されますが、僕はヴァイロン・ステラの効果を発動します。」

500ライフポイントを払う事で破壊された自身を、装備カード扱いで他のモンスターに装備できます。

チェインするカードはありますか？」

遊香 LP 4000 3500

「ん、大丈夫だよ。」

「では僕はヴァイロン・ステラの効果にチェーンし、威嚇する咆哮を発動します。」

このターンは今後、攻撃宣言を行えません。

そしてヴァイロン・ステラの効果処理を続行、ライティング・ハーモナイザーに装備します。」

『威嚇する咆哮』

通常罠

このターン相手は攻撃宣言をする事ができない。

遊香のフィールドに残ったのはシクリボート、ヴァイロン・ステラを装備したライティング・ハーモナイザー。

だけど遊香は自分でこの状況を導いた。いったい何を狙ってるのかしら……

「さて、僕はカードを1枚伏せてターンエンドだよ。」

少女LP4000

モンスター：暗黒界の狂王 ブロン/攻1800

暗黒界の軍神 シルバ/攻2300

暗黒界の術師 スノウ/攻1700

魔法・罠：伏せ2枚

手札：2枚

「僕のターン。、ドローです。」

フォトン・ケルベロスを召喚します、発動するカードはありますか？」

「うん、ないよ。」

「ではフォトン・ケルベロスの効果が発動します、このカードが召

喚に成功したターンには、このカードが表側表示で存在する限りお互いに罠カード<sup>トラップ</sup>は発動できません。」

『フォトン・ケルベロス』

星3 / 光属性 / 獣族 / 攻1300 / 守600

このカードが召喚に成功したターン、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、お互いに罠カードを発動する事はできない。

遊香の言うこの世界では、行動を制限するカードや相手の戦術を崩すような、手札破壊カードやデッキを破壊するためのカード、デッキなどが嫌われる傾向にあるわ。

有名どころで言えば、サイコショッカーと言われる機械族モンスター等ね。

でも遊香は批判されようと敢えてそういうカードを使う。そういうカードを使った方が遊香自身の性に合うらしいわ。

「永続魔法、ヴァイロン・エレメントを発動します。えっと…」

「大丈夫、チェーンはしないよ。」

「わかりました。では続いて伏せていた速攻魔法、ダブル・サイクロンを発動します。」

自分と相手の魔法・罠を1枚ずつ破壊します。

装備カードとなったヴァイロン・ステラと藍沙さんのフィールドの中央の伏せカードを破壊します。」

『ヴァイロン・エレメント』

永続魔法

自分フィールド上に表側表示で存在する「ヴァイロン」と名のついた装備カードが破壊された時、破壊された数と同じ数まで自分のデッキから「ヴァイロン」と名のついたチューナーを自分フィールド



上に特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚したモンスターをシンクロ素材とする場合、「ヴァイロン」と名のついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

『ダブル・サイクロン』

速攻魔法

自分フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚と、相手フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して発動する。  
選択したカードを破壊する。

遊香の宣言に反応し、相手の女の子フィールドにある裏向きのカードがオープンする。

現れたのは暗黒界に続く結界通路だった。

恐らく墓地に暗黒界がいなかったのね、暗黒界に続く結界通路は速攻魔法だから、チェーン発動できたはずだし。

それにしても遊香の手札が0になってしまったわ、それに対して彼女の手札も伏せカードも1枚ずつ。

遊香の狙っている事がもし妨害されたら遊香は負けてしまうわね。負けて問題があるとは思えないけど…

「そして、装備カード扱いだったヴァイロン・ステラが破壊された事でヴァイロン・エレメントの効果が発動します。

「ヴァイロン」と名のついた装備カード…それは装備カード扱いのヴァイロンも含みます。

それらが破壊された時、デッキから「ヴァイロン」と名のついたチューナーを特殊召喚します。

ヴァイロン・テトラを特殊召喚！」

『ヴァイロン・テトラ』

星2 / 光属性 / 機械族 / 攻900 / 守900

チューナー

このカードがモンスターカードゾーン上から墓地へ送られた場合、500ライフポイントを払う事で、このカードを装備カード扱いとして自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体に装備する。

このカードの装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する事ができる。

「ん…：ようやくシンクロするのかな？」

「はい、ようやく出来ます。」

レベル3のフォトン・ケルベロスにレベル4のライティング・ハイモナイザーをチューニング！

天より舞い降りし無機質なる天使！今、三位一体となりて邪を滅せよ！」

3 + 4 = 7

「シンクロ召喚！天へ導け、ヴァイロン・デルタ！」

『ヴァイロン・デルタ』

星7 / 光属性 / 天使族 / 攻1700 / 守2800

シンクロ・効果

チューナー＋チューナー以外の光属性モンスター1体以上

このカードが表側守備表示で存在する場合、自分のエンドフェイズ時に自分のデッキから装備魔法カード1枚を選択して手札に加える事ができる。

ふむふむ、こういう事だったのね。

けど余った2体のチューナーはどうするつもりなのかしら？

シンクロ召喚というのは、チューナ同士では出来ない。

チューナー以外のモンスターと、“チューナー1体のみ”で行う物

……あつ。

「ヴァイロン・デルタ……か。でもそれだけかな？」

「まだいきます！レベル7のヴァイロン・デルタに、レベル1のシ  
キクリボーとレベル2のヴァイロン・テトラをダブルチューニング！  
ヴァイロンを統べし大いなる王よ、漆黒の翼を以て終わりなき争い  
に裁きを下せ！」

7+1+2=10

「シンクロ召喚！振り落とせ、ヴァイロン・オメガアー！」

『ヴァイロン・オメガ』

星10 / 光属性

> i 3 6 8 7 7 — 4 2 1 7 <

天使族 / 攻3200 / 守1900

効果

チューナー2体+チューナー以外の「ヴァイロン」と名のついたモ  
ンスター1体

このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に表側表示  
で存在する通常召喚されたモンスターを全て破壊する。

1ターンに1度、自分の墓地に存在する「ヴァイロン」と名のつい  
たモンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装  
備する事ができる。

効果モンスターの効果が発動した時、このカードに装備された装備  
カード1枚を墓地へ送る事でその発動を無効にし破壊する。

「また重いモンスターを出したね……」。

ダブルチューニングのシンクロモンスターか…。」

「あはは、苦労しました……」

すっかり忘れていたわ。

私は遊香にシンクロの事を教えてもらったけど、その時にダブルチューニングの事も教わった。

ダブルチューニング。

通常、シンクロモンスターにはチューナー1体のみをお使用するけど、例外的に2体のモンスターを使用する事がある。それがダブルチューニング。

遊香はそのモンスターを1種類しか持っていないらしいわ。それがあのモンスターという事ね。

「ふう…。ヴァイロン・テトラが墓地へ送られた時、500ライフポイントを払う事で自分フィールド上のモンスターに装備できます。ヴァイロン・オメガを選択！」

遊香 LP 3500    3000

「また、それにチェインしてヴァイロン・オメガの効果が発動されます。」

このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在する通常召喚したモンスターを全て破壊します！」

「…あーあ…、ブロンとスノウが破壊されちゃった…」

「うぐ…え、えっと、ヴァイロン・テトラはヴァイロン・オメガに装備されます。」

続いて、ヴァイロン・オメガの2番目の効果を発動します。

1ターンに1度、ヴァイロン・オメガに墓地の「ヴァイロン」と名のついたモンスターを選択して装備カード扱いで装備する事ができます。ヴァイロン・スフィアを装備。」

いきなり怒涛のコンボが繰り出されたわね。

ヴァイロン・オメガが召喚されていよいよ調子が出だしたみたい。

「ここでヴァイロン・スフィアの効果を発動します。

装備カード状態のこのカードを墓地へ送る事で、墓地に存在する装備魔法カードをヴァイロン・スフィアを装備していたモンスターに装備できます。」

「……うん…ヴァイロン・スフィアも今から回収するカードも多分、暗黒界の策略で墓地に捨てたカードだよね…？」

「はい、その通りです。」

「あちゃ〜…」

あらあら…。

相手の女の子、少し失敗してしまったみたいね。

ああいう、お互いに手札を交換するカードとかは、案外に気を付けないといけないカードよね。

一見、五分五分の状況に見えて、実は使った方が1枚分カードを消費してしまっているから…。

「つ、続けますね？」

「うん…」

「えつと、ヴァイロン・スフィアの効果により、墓地から巨大化を装備します。」

「え、きよだ…！？？（———）」

「う……きよ、巨大化を装備したヴァイロン・オメガは自分のライフが相手より少ないので二倍となり攻撃力は6400となりますッ！！」

遊香、何か自棄になってるわね。

相手が落ち込んできると何か自棄気味になっちゃうのよね。

まあでも、申し訳なくなるけど勝負事は非情にならないと相手に失礼だからなあ。

って遊香は言ってるわ。

「バトルフェイズですッ！」

ヴァイロン・オメガで暗黒界の軍神　シルバを攻撃！輝きの重撃！

「ぐ！くつつ！！」

少女LP4000　- 100

視点：遊香

「ありやりや、負けちゃったね。君、強いなあ……」

「……あ、あの僕は真田遊香ついていいいます。真田幸村の真田に、遊ぶ香りと書いて真田遊香です。お名前を伺ってよろしいですか？」

「あーごめんごめん、名乗ってなかったね。私は笹木藍沙だよ。笹木に藍色の1億分の1の沙と書いて笹木藍沙。よろしくね！」

> i 3 6 9 7 5 — 4 2 1 7 <

う、ま、まぶしい……何だこの魅惑的な微笑みは！吞まれてしまう！

「ん、どしたの？」

「あ、い、いえいえ！何でもありませんよっ！？」

「フフ、そっかそっか。

じゃあ、遊香君急いでるみたいだしまたね。時間取らせてごめんね

「？」

「あ、いえ、そんな…。僕も楽しかったですから。」

「それは良かったよ。」

それから、「またね！」と言って笹木藍沙さんは去ってしまった。

よく考えたら、この世界で出会った初めての学校以外の友達かもしれないなあ…。

ともかく帰るとしよう。

『ねえ遊香、もしかしたらあの娘、私の事覚えてたのかも…』

「え…？藍沙さんにもカードの精霊が見えたって言うのか？」

『ええ…。気のせいかもしれないけど、最初に私のことを見ていたようだな…』

「……………」

もしかして、ベルクが見えたから僕に話し掛けてきたのか…？

精霊ベルクを連れている僕と決闘デュエルをして……

でもベルクも気のせいかもしれないと言ってるし…、今は心の隅に留めておこう……………。

懐かしいですねプチモスとはにわ。

ジャベリンビートルも懐かしいです。

皆さんはどうかは分かりませんがフェンリルも僕の中では懐かしい中に入ります。

井島君のデッキはジャベリンビートル軸の昆虫族を作っていつの間にかフェンリルとかが紛れてたみたいな設定です。

プチモスとか入ってますので繭、グレートモス、完全体グレートモス等も入ってます。

一度は召喚してみたいなあ。とか考えてますね井島くん。

ところで1万文字超えるのってやっぱり駄目なんでしょうか…。

何か1万文字超えた時に落ち込んでる作者様がいますから、気になったんですが…

皆さんどう思います…？



## Episode?      Everyday to spend with my

サブタイトルの表記を英語に変更しました。

えっと、今回のサブタイトルの意味は『エピソード2、私のしもべと共に過ごす日常』です。

これからは毎回英語なので、もし分からない人がいたら困るので毎回翻訳してご説明したいと思います。

意味無くね？なんて思う方もいらっしゃるかも知れませんが、まあ自分が満足しているので。

ちなみに前回のサブタイトルの意味は『エピソード1、二種類の光の輝き』です。

視点：???

……解せんな。何故、奴が選ばれたのか？  
ただの子供ではないか。

尤も俺も奴とは年齢が近いが、あまりにも無垢で幼い。

知能も低く馬鹿だ。

デュエル  
決闘の腕が多少ある程度か。それも、精々この世界での生活を養える程度。

奴を選んだのはあの小娘だったか…

ふん……、やはり人間の考えは解せんな……

視点：遊香

僕は今、デパートにいる。

今日一日で卒業式、卒業デュエル、帰宅までの道のりと散々疲れているにも関わらず、母が夕食の買い物を頼んできたのだ。

文句を言いたかったが我慢した。

母も何やら作業中であり、父もまだ仕事に出かけていたので人手が無かったからだ。

僕が行くしかない。

ちなみにさっき言った卒業デュエルだが、僕はアカデミアでの成績が良く、会議では満場一致で僕に決まったらしい。5分も掛からなかったという。

デュエルの成績は筆記、実技共に学年一位だったので当然である。相手はオベリススクール二年生の女子生徒だ。自分用にアレンジされた制服が印象的だったが、何故か顔と名前を憶えていない。まあ、会えば思い出すとは思うのだが……

「あ、トマトいるんじゃない？」

「ああ、そうだね。ありがとうベルク。」

「いえいえ」

話を戻すが買い物にはベルクも付いて来ており、実体化して洋服を着ている。

ベルクはいつも鎧や箆手を身に着け、露出度の高いファンタジックな姿をしているのだが、今は黒のタートルネックに鈍い黄色のパーカー、デニム生地ではぼ丈の無い短パンにサイハイソックスという感じ。

見る人によつては僕たちはカップルにも見えるだろうか。嬉しくも嬉しくなくも無いのだが。

…実は角度によつてはパンツ見え…ゴニョゴニョ……

ま、まあとにかく、この世界のデュエリストにとってカードは大切な物だ。

種類によつては宝石などの高級品並みに値が付くものもあり、代表的なものは打ち出の小槌だろうか？

拳銃、ドラマやアニメでも一つの武器やテーマとして登場したり、特定のカードを崇める宗教まである。

僕にとつてもカードは大事なものだ。

護身用としてもこの世界では有用であるし、何よりベルクはアカデミアの入学時からずっと見守ってくれていた。

今思えばもうベルクは僕にとって妹であり姉である存在。そんなわけで僕はデッキをいつも持ち歩いている。

最早、それはデュエリストにとってごく普通の事である。

さて、牛乳、卵、米も籠に入れたし、必要な雑穀、野菜、肉、調味料も全て籠に入れた。

あとは会計を済ませるだけだね。

「この後は本屋でも行こうかな……」

「あ、それなら私も欲しい物があるのだけど、一つ買っていていいかしら？」

「欲しい物？ “物” によるけど、何が欲しいの？」

ベルクが何かを欲しがるなんて珍しい。

ベルクにはパソコンでベルク専用のログを作って使わせてあげたり、僕の持っているゲームや本などを貸してあげたりしている。

本人もそれで満足していると思っていたのだが……

ん、そういえば最近、ベルクがパソコンで怪しいサイトを見ていたような……

「えっと、えっと、薄い本！ / / / /」

「……………ここには売ってないんじゃないかな。」

なんて事だ……

“薄い本” で分かってしまう僕も僕だが、ベルクもすっかり人間に感化されたものだ。

まさかベルクがあんなものにハマっていたなんて……。

内容は聞かないし、言わないでほしい。もう分かってるから。

「そつか…じゃあ原作本でも買おうかしら。」  
「わかったよ。じゃあ先に会計を済ませよう。」  
「ええ」

「198円が一点…120円が一点…」  
「……………」

「合計で3972円になります。ポイントカードはお持ちですか？」

「あ、はい。……………」

「……………ポイントカードお返しします。4002円お預かりします。30円のお返しです。  
ありがとうございます」

「さて。本も買ったし、帰ろうか。」  
「ええ。良い物が買えたわ！」  
「ああ、そうですか…」

しかしすっかりベルクも腐女s…いや、言わないでおこう…。

ところでもう日も落ち、空も藍色に染まっているのだが、ここから籠に荷物を積んで自転車を漕がなければならない。  
5キロほどの米もあるし、大変だ。

ベルクも実体化してるので当然、自転車を漕いで帰る。

今日買った食材はベルクも食べるので、ベルクの自転車の籠にも今夜のおかずが入ったビニール袋を積ませてもらい、代わりに僕の籠にはベルクの買った原作本とやらと米を積む。

ベルクのおかげで多少はマシになったもののやっぱり重いな……。

一つ補足し忘れていたが、都合の良いことに僕の両親はなんとカードの精霊の事を認知できていたのである。

それが発覚したのはアカデミア入学してから1年。最初の冬休みにベルクを連れ帰った時の事である。

本当になんと都合の良い事か。

まあ、そんなわけでベルクも気兼ねなく実体化し、まるで娘のように生活を送っている。

それでベルクは妹になるのか、それとも姉になるのかを問うたところ、両親共に“お姉ちゃんだろう”と一蹴された。

別にいいけどね、別に。気にしてないよそんなこと。ホントだよ。

視点：ベルク

「ふう……。もうお腹いっぱいだ……。」

そりゃあれだけ食べればお腹いっぱいになるわよ遊香。

普段は小食なのに今晚はご飯を五杯もお代わりしたのよね。

「お腹痛くならないの？」

「ん？まあ、あんなにお代わりしたことは無いからね。

さすがに今日は疲れたよ……」

「じゃあ遊香、デュエルでもしましょうか。床でシート敷いて。」

「あ、うん。いいよ」

「よし、じゃあ始めるわよ。」

「うん」

お互いにシートを並べてカードを5枚引く。

遊香のシートはデュエルモンスターズ最高攻撃力で有名なF・G・Dのイラストが描かれていて、私のシートは同じようにデュエルモンスターズで有名なアイドルカードであるブラック・マジシャン・ガールが描かれているわ。

ふーむ。私のデッキは昨日、遊香にカードを貰って組んだデッキね。でも軽く手札事故を起こしてるみたいね…。

軽めだからある程度の切り返しは可能だけど……

「えっと、ベルク。順番はどうする？」

「ん、先行がいいわ」

「うん、いいよ。」

「うふ、ありがと　じゃあドローするわ。

えっと、強欲で謙虚な壺を発動するわね。

デッキからカードを3枚めくって、めくったカードの中から1枚だけ手札に加えて選ばなかったカードをデッキに戻すわ。」

『強欲で謙虚な壺』

通常魔法

自分のデッキの上からカードを3枚めくり、その中から1枚を選ん

で手札に加え、残りのカードをデッキに戻す。

「強欲で謙虚な壺」は1ターンに1枚しか発動できず、このカードを発動するターン自分は特殊召喚できない。

これはこの世界では見かけなかったカード。

遊香の持っているカードは元々、遊香の両親が保管していた物。

詳細は分からないけど、遊香のために用意していたカードという話よ。

カードの枚数は種類だけでも数千枚。枚数では1万枚を軽く超えるほどだった。

そして遊香はそれを前世で持っていたカードとほぼ同じ内容だと言っていたわ。

それにしても遊香はよく1万枚も集めたわよね。

遊香がこの世界に來た経緯は不明だというし…、恐らく遊香のカードは、遊香を転生させた誰かが遊香のために用意したカード…。

遊香はそう予測しているよう。私もそうなのだと思うわ。

「めくったカードは神秘の代行者 アース、ヘカテリス、墮天使アスモディウスよ。

私は神秘の代行者 アース手札に加えて残りのカードをデッキに戻すわ。

そしてアースを召喚。で、アースの召喚時に効果発動よ。

デッキの同名カード以外の代行者、創造の代行者 ヴィーナスを手札に加えるわ。

カードを2枚伏せてターンエンドよ。」

『神秘の代行者 アース』

星2 / 光属性 / 天使族 / 攻1000 / 守800

このカードが召喚に成功した時、自分のデッキから「神秘の代行者



「アース」以外の「代行者」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合、代わりに「マスター・ヒュペリオン」1体を手札に加える事ができる。

ベルクLP4000

モンスター：神秘の代行者 アース/攻1000

魔法・罠：伏せ2枚

手札：4枚

「さつそく回すなあ…。流石ベルクだね」

「遊香がみっちり教えてくれたおかげよ」

「あはは…でも手加減はしないよ。えっと、僕のターン、ドロー。

レベル・ステイラーを手札から捨てる事でクイック・シンクロンを手札から特殊召喚するよ。」

『レベル・ステイラー』

星1/闇属性/昆虫族/攻600/守0

効果

このカードが墓地に存在する場合、自分フィールド上に表側表示で存在するレベル5以上のモンスター1体を選択して発動する。

選択したモンスターのレベルを1つ下げ、このカードを墓地から特殊召喚する。

このカードはアドバンス召喚以外のためにはリリースできない。

『クイック・シンクロン』

星5/風属性/機械族/攻700/守1400

チューナー

このカードは手札のモンスター1体を墓地へ送り、手札から特殊召喚する事ができる。

このカードは「シンクロン」と名のついたチューナーの代わりにシンクロ素材とする事ができる。

このカードをシンクロ素材とする場合、「シンクロン」と名のついたチューナーをシンクロ素材とするモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

あら…遊香は【シンクロン】かしら…？

ちなみに私は、遊香の【代行者】に私なりのアレンジを加えた物。

ん、【シンクロン】VS【代行者】の組み合わせ、勝率は本当に五分五分なのよね。

あ、でも知識は遊香の方が高いし、私が少し負けてるかな？

それに【シンクロン】は急に厄介なのが飛んでくるのよね。

遊香の事だからエクストラデッキも小忠実<sup>こまめ</sup>に入れ替えてるだろうし、バリエーションもある程度練りやすいからシンクロモンスターに関しては全く読めないわ。

あ、そういえばこの世界のデュエルモンスターのルールだけど、どうやら最近になって色々変更されるらしいわ。

あくまで人間界での事だけど、新たにマスタールールというものが発表されて、近日、公式ルールとして認定されるという話。

例えば生け贄をリリース、生け贄召喚をアドバンス召喚、融合デッキをエクストラデッキなど、一部の用語が変更。

デッキ、融合デッキの枚数の制限も新たに設けられ、デッキには今までなら40枚以上なら何枚でも投入できたのだけど、今回からは60枚までとなる。

融合デッキもといエクストラデッキの枚数も、一切制限が無かったのが15枚までとなった。

これは1年前に発表されたシンクロモンスターの事が影響してるのでしょうね。

「で、レベルを下げて特殊召喚したレベル・ステイラーとクイック・シンクロンでシンクロしてジャンク・ウォリアーをシンクロ召喚。」

『ジャンク・ウォリアー』

星5 / 闇属性 / 戦士族 / 攻2300 / 守1300

シンクロ・効果

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

「シンクロン・エクスペローラーを召喚。召喚時に発動する効果でクイック・シンクロンを蘇生。  
ジャンク・ウォリアーのレベルを下げてレベル・ステイラーを蘇生。」

『シンクロン・エクスペローラー』

星2 / 地属性 / 機械族 / 攻0 / 守700

効果

このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「シンクロン」と名のついたモンスター1体を選択して特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

「……え？こ、この流れはまさか…（；。。）」

「……………3体でシンクロでロード・ウォリアーをシンクロ召喚。」

ロード・ウォリアーの効果でデッキからアンノウン・シンクロンを



オリアーとレベル4になったジャンク・ウォリアーとフォーミュラ・シンクロンでシンクロしてシューティング・クエーサー・ドラゴンをシンクロ召喚。」

『フォーミュラ・シンクロン』

星2 / 光属性 / 機械族 / 攻200 / 守1500

シンクロ・チューナー

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体

このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のデッキからカードを1枚ドローする事ができる。

また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚をする事ができる。

『シューティング・クエーサー・ドラゴン』

星12 / 光属性 / ドラゴン族 / 攻4000 / 守4000

シンクロ・効果

シンクロモンスターのチューナー1体＋チューナー以外のシンクロモンスター2体以上

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。

このカードはこのカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。

1ターンに1度、魔法・罠・効果モンスターの効果の発動を無効にし、破壊する事ができる。

このカードがフィールド上から離れた時、「シューティング・スター・ドラゴン」1体をエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

( . . . )

「クエーサー・ドラゴンで神秘の代行者 アースに攻撃。

で、クエーサー・ドラゴンで2回目の攻撃でダイレクトアタック。」

さよなら、パソコン、携帯電話、スマートフォンの前の皆さん。

わたしこのデュエルが終わったら同人誌描くんだ。＼（＾０＾）／

ベルクLP4000 1000 - 3000

**E p i s o d e ?      E v e r y d a y t o s p e n d w i t h m y**

俗に言う無理ゲーですね。

クエーサー優秀ですね。

僕もクエーサーはよく使っていますが、出した瞬間にほぼ勝利が確定します。

クエーサー出して負けたことは1度しかありません。

負けたあの時は流星龍もろとも三連続で除外されました。

ネクロフェイスがあれほど強いとは……

## CHARACTERS ? (前書き)

今回はキャラクターの説明です。

ホントにキャラ説だけなのでご了承下さい。



## CHARACTERS ?

さなだゆうか  
真田遊香

イメージCV：小林ゆう

性別：男性

年齢：19歳

生月日：4月4日

身長：172.5?

体重：58.0?

星座：牡羊座

血液型：A型

現実世界の事故で死亡し、遊戯王シリーズの世界に新たな身体と生を受け、転生した少年。

遊戯王デュエルモンスターズGXでの遊城十代達メインキャラクターが卒業した次の年にデュエルアカデミアに入学。

そのまま何ら事件などにも巻き込まれず無事にデュエルアカデミアを卒業した。

中性的な顔立ちだが喉仏がある事や肩幅など、一目見て男性とは分らないというほどではない。あえて言うなら美青年。

髪は暗めの金髪のロングヘアで瞳の色は紫を帯びた漆黒。

脳年齢は19歳であるが、数値上では41年の年月を経験している。それらを差し引くと精神年齢は19歳のそれよりも大人びており、現状の精神年齢は20代後半程といったところか。

性格は穏やかで温厚。腹の立つことがあってもそれを表には出さずに我慢するような人物。

ほんの少しマゾ気質がある。

光属性やそれらをサポートするカードなどを好んで用い、使用するデッキも光属性や光属性モンスターが中心のシリーズテーマのもの等が多い。代表的なものは【ライトロード】、【ヴァイロン】等。

まれに他の属性も用いることがある。

ベルク

性別：女性

真田遊香の所持するカード、『ベルク』に宿るカードの精霊。

超融合の力により十代と魂の融合を果たしたユベルの妹でもある。

ベルク自身は悪魔族のカードであり、精霊界では暗黒界の住人達と有効関係にある。

精霊界では高位の存在で能力も高いのでベルクも人間界での実態化が可能であり、遊香の両親もカードの精霊に対して理解があるため、普段は遊香の実家で実体化して過ごす予定。

当然ながらベルクも決闘<sup>デュエル</sup>を行い、遊香と同じ光属性のデッキを用い、自身が主体のタイプを使用する。

以下がベルクのカードとしての能力値である。

『ベルク』

星10 / 光属性 / 悪魔族 / 攻2000 / 守0

効果

このカードは戦闘及びカードの効果では破壊されず、このカードを対象とするカードの効果を受けない。

このカードが戦闘を行う事によって受けるコントローラーへの戦闘ダメージは0になる。

<sup>やねあこ</sup>  
笹木藍沙

イメージCV：花澤香奈

性別：女性

年齢：不明

生月日：不明

身長：164.3?

体重：笑顔が怖くて聞けません。

スリーサイズ：B78W52H60

星座：不明

血液型：不明

遊香が降りた港において出会った正体不明の少女。

遊香と決闘<sup>デュエル</sup>を行い、その際には【暗黒界】を使用した。

笑うと可愛い。が、怖い時もある。

全体的に細身な体型。

銀髪ショートボブカットの髪型に淡い青の瞳をしている。

背丈や体格から見て遊香と同じ程の年齢と思われるが、まだまだ謎が多い。

井島正一<sup>いしましやういち</sup>

イメージCV：小野坂昌也

性別：男性

年齢：18

生月日：12月5日

身長：178.2?

体重：62.7?

星座：射手座

血液型：B型

中等部から入学のデュエルアカデミア高等部3年生。一年落第している。

階級はオベリスクブルーだが、学力が低く、成績の伸びが著しい。やる気だけはあるため、オベリスクブルーでも何とかなっている状

態である。

成績が学年一位だった遊香を目の敵にしており、遊香の在校時には何かにつけては喧嘩を売っていたが、結局は遊香に（決闘<sup>デュエル</sup>）でボコボコにされてしまった。

昆虫族の儀式モンスター、ジャベリンビートルを好み、使用デッキは【儀式昆虫族】となっている。

まともに組めば十分強いはずだが、彼は無駄なカードを投入することが多く、知識にも疎いたため勝率は低い。

明けておめでとうございます。

お待たせいたしました、やっと最新話を投稿できましたよ。

活動報告でも書きましたが、実は携帯や無線ランが昨日の夜まで止まったので執筆が出来なかったんです。

改めましてそれではお楽しみください。

サブタイトルの意味は「エピソード3、表裏一体の存在」です。

視点：遊香

「そついえばベルク、伏せてたカードって何だったんだい？」

「……この2枚よ……」

「えっと…聖なるバリア・ミラーフォース、次元幽閉……………」  
「めん、ベルク。」

「…………いいわよ、大丈夫…気にしないで……」

あ、後から罪悪感が……。

ああ、今日は疲れてイライラしてたから……。思わずベルクに八つ当たりしてしまったようだ。

「…………あ、ところでベルク、十代先輩を探しに行くんだよね？」

「ん、ええ。あにえい姉兄ちゃんに久々に会いたいなあつて。」

これはアカデミアの在学当時からベルクから聞いていた事である。  
ユベルと魂を融合した遊城十代……いや、遊城先輩が卒業した事で実質アカデミアに置いて行かれたベルクは途方に暮れていた。

そしてその翌年度に僕と出会い、卒業後からという条件で僕とベルクは共に遊城先輩及びユベルを探す事を約束した。

しかしあにえい姉兄ちゃんという呼び方は……。

「えっと、あにえい姉兄ちゃんってユベルの事だよね……？」

「まあ、あにえい姉兄ちゃんはオカm……」

「それは言わないであげてベルク！ユベルは中性なんだよ中性！性別が無いの！雌雄同生体なの！」

「……………まあそうよね。」

……………余計疲れたじゃないか！

翌日

ん、朝か…。今日から僕は家で過ごす事になる。

また、僕はとある専門学校を受験しており、もし合格すれば明後日からその学校に入学する事となる。

その名もデュエル・ヴォケーショナル・スクール。

通信学校であり、デュエルアカデミアと比べると専門学校であること以外のシステムはあまり変わらず、他に違う点といえば、資格を取得できるという点くらいか？

例えばここでカードデザイナーの資格なども会得する事ができる。

この世界にはデュエル・キャンパスなんてのもあるらしい。

何処に行ってもデュエル三昧なこの世界であるが、前世で遊戯王のアニメを視聴していてもこれほどとは思わなかった。

ともかく、デュエル・ヴォケーション・スクール、略してDVS校ディヴスは通信学校なので、3ヶ月に1度だけ登校する以外は家で勉強していれば良く、基本自由である。

受験はデュエルアカデミアと同じくデュエルで行われ、DVS校でディヴスはネット上で、オンライン通信によるデュエルを行う。

敗けてもプレイングが評価されれば合格できるという内容である。

しかし勝利したほうが評価が高いのは至極当然であり、またこの世界のデュエル界での常識も僕の前世の世界とは大きく違っており、

墓地アドバンテージやハンドアドバンテージがあまり重視されず、海馬コーポレーションを率いる海馬瀬戸や初代決闘王である武藤遊戯を始めとする強者ほど運が強く、運も実力の内という意見が非常に根強い。

そのため嘆かわしい事だが、おろかな埋葬などで墓地肥やしを行ったり、手札抹殺などで手札交換を行う事は入学試験においては減点対象となってしまう。

つまり現実世界出身である僕にとってプレイング評価なんか存在しないも同然のため、僕はとことん勝利に拘らなければ入学はできない。

話を戻す。

僕は昨晚に試験を受けたのだが、相手の後攻1ターン目でいきなりゴヨウ・ガーディアンがシンクロ召喚された時は驚いた。

この時代では1年前にチューナーやシンクロ召喚が普及し始めたのだが、そうは言ってもそれらのカードが海馬コーポレーションから発売されてまだ1年だ。

まさか入学試験であの凶悪なモンスターが出てくるなんて思うはずは無い。

ゴヨウ・ガーディアンがこの時代で既に普及していたなんて…。

5D'sの時代で、牛尾を始めとするセキュリティ達が使用していた事から公務員にしか支給されていないカードなのかもしれない。

あげく試験では、最終突撃命令によって奪われたモンスターを攻撃表示にされ追撃されたと来たもんだ。

本当にあれが試験用デッキなのか！？と思わず疑ってしまう。

まあ最終的には裁きの龍でボコボコにして勝ったから良いけど。

まああの試験では、終わりよければ全て良しというのが僕の最終的な結論だった。



しかし何だろう？僕の横辺りがモゾモゾして…って！？

「ん？あ、遊香あ、おはよあ」

「べ、ベルク？！何で僕のベッドで寝てるんだよ！？」

「いじやない……」

「ダメだつてば！早く出て行つてよ！」

「んもお、分かったわよ……」

……どうして朝っぱらからこんなに疲れないといけないんだよ……。

「あ、降りてきたわね。」

「おはよう母さん」

「ん、おはよ。ベルクと一緒に寝てたんだって？」

「…うん、そうだよ……」

「別に良いんだけどね、一線を越えなければ。」

「それだけはあるえないから安心してよ。」

「それもどうかと思うわよ。」

良いんだよ別に。僕の感覚ではベルクは妹なんだからね。

しかし僕にその気は無いが、僕もあと1年で立派に成人なので一線を越えても別に良いんじゃないだろうか？

「駄目よ、少なくとも成人してからじゃないとそれは認められないわ。」

「ふーん。まあどっちみち今は僕にはそんな相手もないから安心してよ。」

ちなみに僕の母さんは現在45歳。23歳で結婚して26歳で僕を出産したらしい。

父さんは現在47歳。二人とも40代後半に近いのに外見は30代ほどに若くに見えるのは不思議だ。と、そう言ったら二人とも喜んだ。

息子ながら言わせてもらうが、無難な夫婦と言ったところかな？無難に優しく、無難に厳しく、無難な程度に僕を心配してくれ、無難に意見が合い仲が良い。

まあ無難なのは有り難い限りなんだがね。この夫婦は実際、無難な人間を目指す事をモットーとしているらしい。

さて、とりあえずは朝食を済ませて食器を片付ける。そして、部屋に戻って勉強でもしようか。と考えたところ……

ピンポンッ

「ん、ゆーか、出なさい。」

「ん、はい……」

来客のようだ。

もう父さんは仕事に出掛けてるし母さんはまだ食事中だから代わり

に僕が出なければならぬ。

ちなみに僕の家はインターホン付き。だからまずはインターホンに出る。

「どちら様ですか？」

『……………』

画面に映ったのは桃色ショートカットの少女。桃色と言うよりも薄ピンクだろうか？

イチゴ牛乳の色を想像すれば分かりやすいかもしれない。…表現が変だったかな。

少女は無表情で玄関に取り付けられたカメラを凝視しているようだ。

港で出会った笹木藍沙という少女よりも幼い顔立ちだが、幼さと同じ時に大人びた雰囲気も持ち合わせ、表情には僅かにしか感情が感じられない。

蒼い瞳の色からして日本人ではない事が伺え、画面越しでも見た感じの髪質からして桃色の髪は地毛のようだ。

前世では有り得ないのだが、僕がいるこの世界は遊戯王の世界。

何せ海星の様な形の頭で髪色が三色の男や、蟹の作り物を被った様な髪型の男がいるほどだ、もはや桃色の地毛の髪を持つ少女なんて、それらに比べれば全くもって珍しくないのだ。

…と、僕がたった数秒間の間の現実逃避気味な考え事を終えたところで画面に映った少女が口を開いた。

『真田遊香はあなた…？』

「あ、はい…」

僕を名指し？この少女とは面識がないはずなんだが…

『私はアカロノ・トラヴィットと言う者。あなたに用がある。出て来てくれると助かる。』

「あ、はい…分かりました……」

何だろうか？ 僕が思い出せる限りの記憶の中にはこの少女はいない。はつきり言えば全く知らないわけで。…デュエルアカデミアで会った事があるとか？

ともかく玄関まで向かい扉を開く。

ガチャ…

「……………」

僕が玄関の扉を開けると、アカロノという少女が呼吸をちゃんとしているのか心配してしまうほどの不動で僕の目の前に直立し、僕の顔を見つめていた。

少女は印象的な桃白色の髪が艶やかで美しく、鼻筋が通った綺麗な顔立ちで体つきも華奢な、一見すると俗に言う守ってあげたい系だろうか。

まるで洒落た女の子の人形の様で、率直に言って非常に可愛らしい少女である。

自分で言うのもなんだが、僕くらいの年頃の若者がこんな綺麗な少女を見れば思わず一目惚れでもしてしまうだろう。それ程の可愛い少女である。

だが僕は二度の十九年を経験しており、他と比べればマセてる方なのでそう簡単には陥落しないつもりだ。

…なんて思っていた時期もありました……。

「あなたが遊香……」

「あ…は、はいっ／／／／／／／／」

いきなり名前で呼ばれた…何なんだこの子は…／／／／／／／／／／と、いきなり心を半分ほど驚掴みにされてしまった僕である。

我ながら情けないとは思うのだが、『この子、可愛いな』とか少し考えてしまっただけである。

決して落ちたわけではない。セーフだ、セーフ。

「私はあなたに会いに来た」

「コホン、え、えっと…僕に会いに来たんですか…、いつたい僕に何の用ですか…？」

「……確かめに来た。」

バックアップの生存の確認とその状態。並びにその能力と身体機能、改善点、現状の確認。」

ば、バックアップ？この少女はいきなり何を訳の分からない事を言ってるんだ？

生存ってことは、生き物のことを言ってるのだろうけど……

ってどうか状況から考えてバックアップって僕の事だよね、どう考えても…。

どっちにしる謎だ。

百歩譲って僕がバックアップなんだとして、いったい何のバックアップだというのか。

すると僕の『訳が分からない』という様子を察したのか、アカロノは更なる言葉を続ける。

「バックアップとはあなたの事。」

「あ、はい…。内容からしてそれは分かりましたけど…」

「………今はそれだけで十分。  
私はあなたをよく知っている。」

「あなたがこの世界の19年前に前世の記憶を持って産まれた事、あなたが4歳児の頃に肘を熱火傷し、今でも跡が残っている事」  
「……………」

右肘を摩ってみる。

触った場所は小さく細かにプクツと膨らんでおり、触って痛いという訳ではないが跡が残っている。

アカロノの言う通り、これはこの世界で出来た火傷の跡。どうやらこの少女は僕の経歴を調べたようだ。  
そしてまだまだアカロノは言葉を続ける。

「小学校に入学したての頃、皆の前で誰にも解けなかった問題を解いて天才だと驚かれた事、

小学校4年生の頃、隣の席の女子があなたの……」

「あつ！もう良いです！分かりました！もう言わないでください！あなたが僕の経歴を知っている事はもう分かりましたからそれ以上は言わないでください！おねがいしますうううっ！！」

「……………理解してくれたようで助かる……」

「はあ……あれ以上言われてたら発狂モノだよ。あああああゝ恥ずかしい……／＼／＼／＼／＼／」

まさか先程とは別の意味で慌てさせられるとは考えもしなかった。

あの話題だけは掘り返してはならない。

今世での出来事であり、前世の記憶があるため子供の頃からマセガキであった僕ではあったのだが、そんな僕でもあれは恥ずかしかった……。

お願いだから掘り返さないでほしい。

「……………あなたを困らせてしまった。ごめんなさい……」

「あ、い、いえ、だ、大丈夫ですよ」

「…ならよかった、話を続ける。」

なんかクールと言うか、ドライと言うか…とにかくアカロノさんはテンションが冷めてる様だ。

もしかしてこれが俗に言うクーデレと言う存在なのだろうか？

実物で見るのは初めてなのだが、そうだとしたらこれはデレ期が楽しm…い、いや…やめておこう。

僕は彼女をデレさせる自身が無…ってそういうことじゃない！

「私の役目は、あなたのあらゆる事とその周りの事情を把握し、あなたとあなたの周りの者をサポートする事。それが私に与えられた使命と義務。」

「与えられた……いたい誰に…？」

「…それはわからない。」

「え…わ、わからない…？」

あれだけペラペラと活字を羅列していた彼女から『わからない』なんて言葉を聞いて思わずキョトンとしてしまった。

すると今まで無表情だった彼女が俯き、微々たるものではあるが悩ましげなものに表情を変えた。

その表情のままアカロノは口を開く。

「……寒いから家に入れてほしい…」

「あ……そ、そうですね…。すみません、気が付かなくて…」

「構わない」

確かに寒い…どうやら僕は気遣いが足りないようだ。

視点：ベルク

おはよう皆さん、ベルクよ。

今日は遊香が彼女を連れて来ましゅ（ry

「いや、彼女じゃないから！初対面だから！」

「あらそう、じゃあこれからなるのね。」

長い間、玄関で話し込んでいたみたいだしね。

なるほどなるほど、遊香も恋をするという事ね

「わ、分からないよそれはっ！／／／／／」

「：分からないとは私と遊香が恋人恋愛関係に発展する可能性があるという事…？」

「あ、いや、でも、あの、あ、え、どっ／／／／／／／／／／／」

あらあら…アカロノちゃんったら大胆ね

なるほどね、アカロノちゃんはクーデレなのね。

「確かに可能性はある…。」

「えええっ！？／／／／／／／／／／／」

「あらあ……………」

あ、アカロノちゃんストレートねえ…………流石クーデレだわ…



「でも私にその気持ちは無い。よって現状を保ち続ける場合に限り、可能性は限りなくゼロに等しい。」

「…うん、まあそうですね…」

「……………ま、まあそうですね。」

た、確かに、出会って30分も経っていない相手と付き合うなんて事はできないわよね…。

「…え、えっと、アカロノさん。さっき玄関でしていたお話、ベルクにもお話していただいても構いませんか…？」

「………了解した。」

「あら…？何のお話かしら…？」

視点：遊香

「ええっと、要するにアカロノちゃんは遊香をサポートする使命を与えられた存在で、遊香をサポートするためにアカロノちゃんは遊香の経歴をある程度知ってる。」

で、けれどアカロノちゃんに使命を与えた人物の事は分かっていない…これで合ってるかしら？」

「…問題ない、ほぼそれで合っている。」

アカン、完全に僕がフラれたみたいになってる…

て、ていうかアカロノとは年は3つ離れており、僕は何となく3つ離れた相手と交際するのは少し抵抗があるし、まだ好きになったわけでもない……はず。というかそもそも告白した記憶さえ皆無…。

「ん、とりあえず話は理解したわアカロノちゃん。」

「理解してくれて助か（ry）」

「嫁ぐのねアカロノちゃん!!」

「……………違う。」

だあああああ!! やっぱ勘違いしてらっしやる!!!!

「ああもう!! いい加減にしてよベルク! 本気で起こるよ!？」

「あはは、冗談よ。じゃあ続きを話してもらいましょう。遊香もそれで良いわね？」

「あ、うん。いいよ」

「アカロノちゃん、あなたに使命を与えた人物の事は分かっていない……これはどういう事なの？」

「…了解した、順を追って説明する。」

安心した、どうやら話を戻してくれるようだ。

「話は三年前まで遡る。……………私は三年前まで普通の中学一年生で13歳の少女だった。」

今ほどの知識も無く、性格も今とは大きく違って明るかった。

プロデュエリストを目指したこの世界ではごく普通の少女だった…」

僕達の目の前でアカロノが放っている雰囲気からは、明るい性格の彼女なんて全く想像できない。

彼女をここまで変化させてしまった原因は何なんだろう？

「だが3年前のある日、私宛にとある郵便物が送られてきた。」

「郵便物？封筒とかですか？」

「そう、封筒。」

「送り主は誰だったのかしら？」

「……………分からない。封筒には書かれていなかった。」

……………興味本位で封を開けると、封筒の中から私の目の前に何かが現れた。

光とも闇とも視覚できる存在、この世のモノではないと直感した……………。

そして私は思わずその存在に肌で触れてしまった。」

光とも闇とも視覚できる表裏一体の存在……………サイドウス……………。と言えは良いか。

その存在がアカロノをここまで変えてしまった……………？

「どうして触れてしまったの……………？」

「……………上手く表現できないが……………美しいと感じたから……………。

あれが放つ闇も光も、どちらも神秘的で美しかった……………。

私はそれが愛しくて堪らなくなってしまった。体全体でその存在を抱きしめた……………。

軽率だった。」

闇と光を併せ持つ……………それは人の性質その物だ。邪な煩惱よこしまの心、思いやりの善の心。

それら両方を併せ持つからこそ人間は人間足りうると僕は思う。

そして人が人を好きになるのはまさに摂理。

アカロノはサイドウスが放つ闇と光を、人間が放つものと無意識下で勘違いしてしまい、触れた……………。

「触れた途端、私の心は深い恐怖と後悔に満ちた……………。私の中にある

ものが流れ込んできた……。」

「何が流れ込んできたんですか？」

「……………幾多の13年分の記憶……私であり私でない人間達が記憶した情報だった……。」

気づけば私は気を失っていた……………」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4199y/>

---

遊戯王デュエルモンスターズ 真十二皇将

2012年1月5日18時50分発行